会得した真理を実践する空手道

諦（てい）を悟る

※諦＝真理・まこと

第一回　誠の力

己にウソをつかない

司馬温公（しばおんこう）という人をご存じでしょうか？　宋の時代の大学者であり、また大政治家でもあった人物です。

ある日のこと、門人の劉安世（りゅうあんせい）が「人間が一生涯を守る言葉があるならば教えていただきたい」と尋ねました。

司馬温公は「それは誠である。誠の一字こそは、終生守っても、一つも間違いないものだ」と答えました。

「では、その誠に至る方法は？」と劉安世が重ねて尋ねると、温公は「ウソ」を言わない事だ。「妄語せざるより始まる」と教えました。

人に「ウソ」をつかないことは、もとより大切な事ですが、さらに大切な事は、己に「ウソ」をつかない点にあります。

空手の稽古の中で己に「ウソ」をつかないということはどういうことか、と深く考えてみますと、技を出す場合、技と自分が一体になるということが「ウソ」をつかない、「誠」の状態になるということに私は気付いたのです。

その時から、自分の稽古方法が変わりました。稽古の時、自分の持っている力を全力で出し切り、自分の限界に挑戦することに切り替え、自分と闘い、自分と勝負したのです。

稽古で苦しく、どうにもならなければ倒れようと思いながら、自分に挑戦し稽古を一ヶ月、二ヶ月…、半年と継続するうちに、変化が起こってきました。

限界に挑戦することによって、筋力がつき、力とスピードが増していきました。もう一つ、気を取り込み、気でもって、相手の動きを殺すことが身についたのです。

森俊博（もり・としひろ）プロフィール

昭和25年、宮城県亘理町出身。昭和48年東北学院大学（経済学部）卒業。第４回全空連全日本空手道選手権大会優勝（昭和50年）。第21回JKA全国大会（昭和53年）、第23回大会優勝（昭和55年）。第３回 IAKF世界空手道選手権優勝（昭和55年）。師範、総本部理事、国際理事、政策委員。

「論語は人間の心を養う道を説いた人間学の書です。その神髄を端的に表現したものが四書五経の一つ『大学』です。この連載を通じて、その一端を紹介していこうと考えています」と語る森俊博氏。

物事は結合される

技と自分が一体になる状態を「誠」の状態といって、そのことと一体になることを日本語では「むすび」といいます。「むすび」とは、「わけ」の反対で、自と他の二つが結合して、一つになることです。

我々の祖先は、この「むすび」という日本語に、漢字が渡来した時に「産霊」の文字を当てて、これを「むすび」と読みました。

「産霊」とは、ものを産む働きです。「産」を「むす」と訓んで、「産む」という意味に用いたのです。

今でも産まれた男児を「むすこ（産子）」といい、女児を「むすめ（産女）」と言います。

ゆえに現在でも産む働きの根源たる霊妙な力を「霊（ひ）」といい、それによって産まれた男女を「霊子（ひこ）」「霊女（ひめ）」というのです（「むすこ」「むすめ」「ひこ」「ひめ」は本来、同義語）。

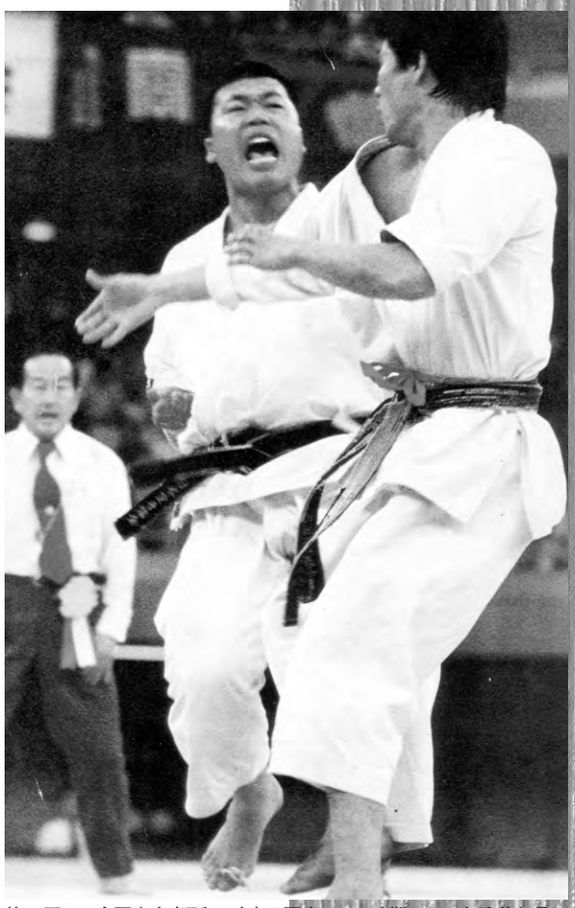
全て物事は「結合」されるから「産霊」が行われます。結ばれるから産まれるので、「産霊」は結果であり、「結合」はその結果を生ずる過程と言ってよいと思います。

その最もよい例が「男」と「女」が結婚して「夫婦」となることです。

夫婦として、完全に結合するところから、新たなる生命が産まれるのです。

このことから、何かと一体になることによって必ず何かが産まれるのです。

これは人と人、人と技、人と物、物と物等々、万般の関係に通ずる大原則なのです。このように、我々が「誠」を本当に会得、体得することができれば、「誠の力」は大きな力となり、自己の人生を豊かなものに築く事ができるのです。このことを私は空手の稽古から会得したと考えています。



第21回JKA全国大会（昭和53年）の写真。この時期から、空手道を通して学んだことを社会生活で活かし、人生をより豊かに歩むにはどうすればよいのかを考え始めていた。